宇宙船レグルス2号　メルグ星編

1　飢え死にするしかないね

ここは宇宙船レグルス2号の船内ミーティングルーム。

乗組員のジョージ、キリル、マテウスはテーブルを囲むように座り、シンコクな表情を浮かべている。

「食料が、いつまでもつって？」

キリルが酒を瓶からラッパ飲みしながら聞く。キリル・ベナークは、操縦を主に担当している。ぼさぼさの銀髪に無精ひげを生やし、片手にはいつも酒瓶を持っている。

「だから、あと三日だって言ってるだろ」

ジョージ・スプリングフィールドは、副操縦士で通信担当である。髪は赤毛。長身でがっしりとした体格をしており、いつも陽気な楽天家だ。

船長のマテウスはパネルを操作しながらジョージに尋ねる。

「一番近い補給基地まで何日かかる？」

「さっき計算したら、一番近い補給基地まで十日かかる。さあ、みんなどうする？」

「飢え死にするしかないね。」

キリルが首を振りながらお手上げのポーズをとると、マテウスの顔にみる

さくらぷりんと®

みる怒りが浮かぶ。

「おいおい、ジョージ。まさかＳＯＳ信号出してないとかないだろうな？」

普段冷静なマテウスは、怒ると大変に口が悪くなる。キリルと同じ銀髪だが、こちらはビシッと七三に分けており、シルバーフレームの眼鏡の奥には、アイスブルーの瞳が鋭い眼光を放っている。

「うん。出してないけど……」

「けどじゃねえぞコラ！　何日か前に、出しとけよって言ったら『まかせとけ』って言っただろてめえ！」

「いやあ、すまんすまん。忘れてた。」

笑いながら頭をかくジョージに、マテウスはすごいケンマクで詰め寄る。

「お～ま～え～、おれたちを殺す気か！　さっさとＳＯＳ信号出してこい、この役立たず！　今すぐ！」

マテウスのものすごい勢いに、ジョージははじけるように操縦室に飛んでいき、ＳＯＳ信号を発信した。

さくらぷりんと®

２　ジョージのピザ

ピザはジョージの大好物だ。そして最も得意な料理だ。

この日、ジョージは冷凍庫にストックしてあるピザではなく、粉からこねる本格的なピザを作っている。

「おっ、いつものピザじゃねえか。オレたちの分もあるかい？」

キリルが酒の瓶を片手に、キッチンにやってきた。

「もちろんさ。たくさん作るよ。」

粉をこねるジョージは、張り切った様子だ。

「ところで、キリル」

ジョージが尋ねる。

「なんでいつもお酒を飲んでいるんだい？」

「そうさな……」

キリルは、瓶からぐいっとひと口飲んで語り始めた。

「おれのご先祖様の住んでいた国ロシアは、とにかく頭がおかしくなるほど寒いらしい。だから、酒で体をぬくめてないとやってられない。地球にいたころのロシア人は、酒の飲み過ぎで死ぬか、凍え死にするかのどちらかだったのさ。」

「地球か……っておい。キリルが酒ばかり飲む理由になってねえよ。何千年前の話だよ」

さくらぷりんと®

「がはは、確かにな。ところで、地球っていやあ。地球人同士で戦争ばかりしてたらしいじゃねえか、馬鹿な時代もあったもんだ。」

「まったくだ。しかし、あんな小さな惑星の中だけでシゲンの奪い合いをしていたんだから、争いが起こるのも無理はないかなと思わないでもない。それでも、地球人同士で殺し合うなんて、たしかに愚かだ。」

二人が話していると、マテウスがやってきた。

「パワハラ船長のマテウスさんが来ましたよ。」

とキリルが冗談めかして言う。

「パワハラとは何のことか？」

マテウスが真面目に答えると、ジョージが声を上げた。

「『てめえ』とか、『コラ！』とか、『役立たず』とか、そういう荒っぽい言葉を使うとパワハラになるんじゃないの？」

「私はそんな下品な言葉遣いはしない。私がいつ、そんな言葉を使ったと…」

マテウスが言いかけたところへ、ジョージが笑いながらさえぎった。

「いやいやいや、こないだおれがＳＯＳ信号を出し忘れたときはすごかったよ。あんな迫力のあるパワハラはめったに聞けないね。」

「あのＳＯＳ信号によって、私たちはたまたま通りかかった貨物宇宙船に食料を分けてもらうことができた。食料が底をつきかけていた私たちは、そのおかげで命拾いした。でなければ、今ごろは、のんきにピザ生地をこね

さくらぷりんと®

たり酒を飲みながらバカ話してられないところだ。」

「運がいいんだな。おれたちは」

キリルがぐびりと酒瓶をあおる。

「運などを当てにして、この宇宙で生き残れると思ってるのか？　運を当てにしなくてもすむように行動することが大事だと考えているが」

「マテウスはそれでいいさ」

階級も役職もマテウスの方が上であるが、キリルもジョージも「マテウス」と呼び捨てである。マテウスも、そこは気にしていないようだった。レグルス２号は調査船であるため、長旅が多い。何十日も一つの船で過ごすため、階級だ役職だと堅苦しいことを気にかけ続けるのは、しんどいものである。したがって、規律にうるさいマテウスも、互いの呼び捨ては気にしていない。

キリルの飲酒も本来ならよくないことかもしれないが、マテウスはそこもうるさくは言ったことがない。「それぞれの役割を果たしてくれたらそれでよい」とマテウスは考えていた。「［　Ａ　］、これはとても不思議なことだが、キリルがミスをしているところを、マテウスもジョージも見たことがなかった。

さくらぷりんと®

3　長旅

レグルス2号は、宇宙資源や航行可能経路の調査船である。

いろいろな星系に出かけて行き、そこに活用可能な資源があるかどうかを調査する。また、安全に航行できる宙域、危険な宙域を調査し、マッピングする。

地球人が、この銀河系で活動できる範囲は限られている。技術的に遠くまで行けないためである。

西暦六千二十五年現在、地球人が宇宙旅行を可能にしてから四千年が経つ。そして、約三千年前、地球人は環境汚染でボロボロになった地球を脱出して、今はトラピスト星系の第三惑星を拠点としている。それから、居住区としてトラピスト星系にいくつかの宇宙ステーションを建設した。そういう意味では、彼らを「トラピスト星人」と呼んでもよさそうだが、話の進行の都合で「地球人」と呼ぶことにする。

さて、宇宙旅行を可能にしたとはいえ、地球人にとって銀河はあまりにも広大であった。現在の地球人の技術では、最新鋭の宇宙船をもってしても、二万光年を四十年で往復するのが航行速度の限界である。〔　B　〕、現在の技術では、一万光年を進むのに十年かかる。これでもかなりの技術革新があってのことだ。

さくらぷりんと®

太陽系は、銀河の中心部からおよそ二万六千光年の位置にある。したがって、太陽系から銀河の中心部へ行くためには、現在の地球人の技術では、行って帰ってくるのにおよそ五十年ちょっとかかることになる。

難しい話はさておき、地球人が宇宙を航行するとき、実は技術的なことよりも、領空的な配慮の方が重要になる。

「　C　」、この銀河には、地球人以外に少なくとも二種類の宇宙人がいることが分かっている。

それが、メルグ星人とキョブ星人である。

地球人から見たキョブ星人は、攻撃的で領土的野心を隠すことがない。そして、地球人がその航行範囲を銀河の約十分の一までに広げたとき、キョブ星人はメルグ星人とすでに敵対していた。

メルグ星人は、キョブ星人と違い、領土や領空を広げようとする野心がない。温和で平和的な人々である。地球人としては、できればメルグ星人さんたちとお付き合いを深めたい。

宇宙に乗り出した地球人は、新参者であり、支配している銀河の領空もメルグ星人やキョブ星人に比べるとはるかに少ないし、技術も劣っている。したがって、宇宙を航行するときは、メルグ星人の支配する領空、キョブ星人の支配する領空にうっかり侵入しないように気をつけなければならない。

今回の調査では、レグルス2号は、かなり遠くまで航行していた。最後の補給基地を出発して、すでに五十日が経過している。物資や食料は十分に積

さくらぷりんと®

み込んでいるが、五十日を超える調査航行をするのはレグルス2号にとっては初めてのことである。

そして、五十日におよぶ宇宙空間の航行は、想像を絶するほど退屈である。やることと言えば、食べること、寝ることである。それ以外は何もない真っ暗な空間をただ進むだけである。

銀河系には千億から四千億もの星が存在すると言われている。このように聞くととても多いように感じるかもしれないが、銀河系の星の密度は、我々が想像するよりもはるかに薄い。

こんなたとえがある。銀河系の星の密度は、太平洋にスイカを三つ浮かべた程度であると。

たとえば、太平洋に船を浮かべて航海することを想像してみる。そして広大な海のどこかに、三つのスイカが浮かんでいるそうだ。この船が、これらのスイカの一つにでも遭遇する確率はどれほどのものだろうか。

レグルス2号は、そういう旅をしているのであった。海ならまだましだったかもしれない。海ならば、少なくとも、昼と夜があり、晴れる日もあれば雨の日もあろう。たとえスイカとすれ違わなくても、景色の変化があるのだから、そこそこ気はまぎれそうである。しかし、宇宙空間は違う。ただただ漆黒の闇の中を進むのみである。「　D　」、今回のレグルス2号の進路は、銀河の中心部とは逆向きに進んでいる。銀河の辺境に向かっているので星の密度はますます薄い。

さくらぷりんと®

そんな、暗く冷たい宇宙空間を進んで何週間かが経過するうちに、勤勉なマテウスも、ついに読書疲れを起こしてしまった。

ありったけのピザを焼いてやろうと、たっぷり小麦粉を持ち込んだジョージも、ピザ作りに飽きてしまったようだ。

キリルは相変わらず酒を飲んでへらへらしている。

退屈な時間が、流れていた。

さくらぷりんと®